

豪州メルボルンのアジア図書館の取り組み

—Asian Libraries in Melbourne (ALLIM)—

八田 綾子

●メルボルンの街

路面電車でも有名な街メルボルンは、どんよりとした曇り空が多く、かとおもえばとても気持ちのいい天気もあり、天気がよく変わるので一日に四季があるとも言われている。メルボルンは国際色豊かな多民族州で、歴史的にイギリス、イタリア、ベトナムからの移民が多かったが、二〇一一年の出生別国勢人口統計によると現在はニュージールランド、中国、インド生まれの人口が飛躍的に増加している。一方留学生はモナッシュ大学統計によると、マレーシア、中国、インドネシア、シンガポールを中心としたアジア系留学生が二〇〇四年以降、急激に増加していった。

●アジア言語の教育体制

アジア系移民と留学生が増えた

なか、オーストラリアの小中高等学校教育において近年のアジア言語（中国語、インドネシア語、日本語、韓国語）教育の状況が二〇一〇年に発表された。各言語別に

報告書が出され、四言語の現状と問題点をそして今後どのようにして学習者数を増やすかの対策が述べられている（参考文献①）。豪政府はその後二〇一二年一〇月に「アジアの世紀」と題し、近隣アジア諸国とのより豊かな関係構築と繁栄を目指す為、経済、社会、アジア文化、言語習得に対する努力の必要性があると発表した（参考文献②）。二〇一三年一月の政権交代によりこの方向性が引き継がれるかは不確かだが、アジア近隣諸国との社会・異文化理解を含めたコミュニケーション能力を有する国に育つよう期待したい。

又これをどう支援できるかは図書館司書の課題だ。

●メルボルンのアジア図書館 (ALLIM) の歴史

メルボルンのアジア図書館 (ALLIM) とは、メルボルン大学とモナッシュ大学間のメルボルン・モナッシュ協定のもと、アジア研究とアジアの言語習得に従事している学生、教員、研究者を支援する為にメルボルンの図書館司書が立ち上げた事業である。

アジア研究には大まかに中国・日本・韓国を含む東アジア研究、インドネシア・タイ・カンボジア等を含む東南アジア研究、またインド・スリランカ等を含む南アジア研究に分けられ、近年では翻訳通訳のビジネスをはじめ、政治経済学、マスメディア、ポップカルチャー、移民、グローバル化研究の傾向が強く、現在では更にひとつの国に留まらない国境を越えた研究が盛んになってきている。

アジア研究と言語習得が活発化した一九九〇年代初期のオーストラリアでは、研究者からのアジア関連資料の要望が増大しているにもかかわらず、各大学図書館の僅かな予算内で蔵書構築をせざるを得ない状況にあった。ちょうどその頃、首都キャンベラでは主要なアジア言語関連資料収集を促進する構想が練られ始め、至近距離にあるオーストラリア国立図書館とオーストラリア国立大学図書館がその問題解決に向けて討議していた。限られた予算内の資料収集と



写真① モナッシュ大学図書館



写真② モナッシュ大学図書館アジア研究室

蔵書構築を行うなかで、図書館司書としてアジア学研究者を一体だけでなく支援できるのか、また目録データベース構築の際にアジア諸言語の表記を国レベルでどこまで標準化できるのか挑戦していたのもこの頃だ。

一方同様にメルボルンの図書館司書も、利用者の声に応えようとメルボルン大学とモナッシュ大学図書館の二つが中心に動いていた(参考文献③)。各図書館長も利用者への図書館サービスを向上し、限られた予算と人員を最大限活用するには、この二つの機関が連携して協力し合い、専門知識の共有

と資料構築の共用が必要だと認識していた。一九九三年よりメルボルン・モナッシュ・アジア・ライブラリー・グループという名前で定期的に会議が始まり、後の一九九六年六月にはメルボルン・アジア・リサーチ・ライブラリーズ・コンソーシアムという名称に変わった。一九九七年には大学学長レベルで二つの大学は、競争しあうのではなく協力し合うべきだと合意し、メルボルン・モナッシュ協定が結ばれた。この協定はその後の二〇〇四年に名称を改めたメルボルンのアジア図書館(ALIM)の活動を強く支える基盤となった。更に人員面でも東南アジア担当司書が両図書館の蔵書構築の為に採用され、アジア関連資料蔵書構築と文献複写貸借サービスの相互協力体制が強化された。

●ALIM活動とその影響

中心業務地区に位置する歴史あるメルボルン大学と、その後設立され世界各地にキャンパスを持つモナッシュ大学とは、約二五キロ離れた場所に位置している。メルボルン大学の東アジア図書館には主に中国、日本、アラブ諸国およびインドネシアの研究資料コレ

クションがあり、一方、モナッシュ大学のアジア研究室には中国、日本、韓国およびインドネシアの研究資料コレクションがある。各大学図書館には、これらのコレクションを担当する専門の司書がいる。この二つの図書館は資料共同利用と蔵書構築の協力を目的とした連携を行っている。また、ALIM活動を独自のウェブで公開すると共に、年に二度、定例会議を開催し、相互の情報交換と、様々な活動計画の立案を行っている。

アジア研究者が利用しやすい蔵書構築を目指す為には、第一に資料の共用と情報の共有は欠かせない。例えばメルボルン大学のアジア建築コースを支援する為、韓国研究資料のないメルボルン大学は、必要とされる韓国資料の積極的な購入をモナッシュ大学に依頼し、モナッシュ大学からメルボルン大学への学期間特別貸出しが行われている。更にALIMアジア建築プロジェクトとして、両図書館司書を交えて資料探索の講義が行われ、両大学のウェブ上で情報をリンクすることで情報共有が図られている。これにより二大学間の特別貸出しが可能になったと同

時に、図書館司書の専門知識を集結することができた。

次に蔵書構築においては、例えば両図書館にある日本研究資料には以下の特徴がある。日本語教育は共に活発であるが、その上にモナッシュ大学はビクトリア州を含め近隣三州の小中高等学校の日本語教師を支援するための資料を集めている。それに対しメルボルン大学は歴史、特に関東大震災と太平洋戦争関連資料の収集に力を入れている。また選書段階で双方に図書、雑誌、データベース資料が重複しないように可能な限り調整し合い、相互貸借サービスで補



写真③ メルボルン大学 東アジア図書館

い合うことで、より広範囲に効率良く日本研究の情報源がメルボルンに収集されることになる。

また最新企画のひとつに共同展示がある。メルボルン大学図書館蔵書資料をモナッシュ大学図書館で展示し、その逆も行う企画である。これは図書館利用者に向けて、双方の蔵書資料およびALIM活動を後方支援する目的で実施している。利用者だけでなく両図書館司書の蔵書理解にも繋がり、相互に関心と認識を高めることになる。

更にALIM司書は自ら調査活動も行う。国内のアジア研究図書館の状況に関心を持ち、アジア関連資料室と専属司書の現状調査を行うとともに、アジア研究に活発な大学を中心に購読データベースの所蔵調査も行っている。調査結果はウェブ上で公開し、さらに言語別に論文等でも発表している。過去にビクトリア州公共・大学図書館のアジア言語資料所蔵調査も公開したことがある。

ALIM司書は積極的に学会にも参加し、図書館討論会および図書館ブースを設ける企画を実行してその報告を発表している。国内の大きな学会にはアジア研究学会

と各言語別研究学会があり、それぞれ二年に一度、一年遅れで交互に開催されている。結果、毎年学会が開催されていることになり、そこは普段メールや電話等で連絡し合うが、なかなか会うことができないう同職のアジア研究司書との貴重な交流・情報交換の場となっている。

このように二つの図書館の共同事業によって生まれたALIM活動は、両図書館司書の協力と努力なしには実現できない。全てはアジア研究支援へのサービス向上を目的とするが、この共同事業は蔵書構築、および専門司書・予算の獲得においても確実にたくさんのお恩恵をもたらしている(参考文献④)。

●終わりに

ALIM活動はメルボルンのアジア研究と言語習得に従事する学生、教員、研究者を支援するには欠かせない共同事業である。メルボルン・モナッシュ協定のもと、図書館司書の継続的な協力が欠かせない。その上政府が再認識したとおり、今後オーストラリアが「アジアの世紀」へ向かうためにも、アジア研究の活発化が肝要と

なる。その為にはアジア研究を支援するための強力な情報資源、図書館の蔵書、そしてそれを構築していく専門司書を確保し続けることがますます重要になるだろう。

(はった あやこ)モナッシュ大学図書館アジア研究室日本研究司書

《参考ウェブ》

●メルボルン大学東アジア図書館
<http://www.lib.unimelb.edu.au/collections/asian/>

●モナッシュ大学アジア研究室
<http://monash.edu/library/collections/special/asrc/index.html>

●ALIM活動独自のウェブ
<http://alim.monash.org/>

《参考文献》

①Commonwealth of Australia (2010). *The current state of Chinese, Indonesian, Japanese and Korean language education in Australian schools: four languages, four stories*. Retrieved from http://www.asiaeducation.edu.au/verve/_resources/OverArchivingReport.pdf

②Commonwealth of Australia (2012). *Australia in the Asian Century White Paper*. Retrieved from <http://pandora.nla.gov.au/pan/133850/20130914-0122/asiacentury.dpmc.gov.au/sites/default/files/white-paper/foreword.pdf>

③Arthur, T & Ho, C.H. (2000). *Melbourne Asian Libraries Consortium and Japanese information resources. EALRGA Newsletter, 41, 7-12*. Retrieved from <http://www.ealrga.org.au/newsletters00/0005.arthur.pdf>

④Hall, M (2011). *Collaboration and co-operation in Asian library resource collections - an example from Melbourne, Australia. Library Management, 32(1/2), 98-110*. doi: 0.1108/01435121111102610